

『漢書』郊祀志の「泰一」の祭祀について

村田 浩

泰一（「太一」）とも表記されるが、本稿では、引用文を除いて「泰一」と表記することとする。の祭祀は、武帝以後の漢代を通じて、最も重要な祭祀の一つであった。本稿は、『漢書』郊祀志によつて、泰一の祀りの変遷を跡づけようとするものである。

一、長安の泰一の祀り

『漢書』郊祀志は、『史記』封禪書を略ぼそのまま引き写す形で、武帝までの祭祀の変遷を述べている。それによれば、武帝の時代までに行われるようになった祭祀は、いずれも皇帝の意によつて行われるようになったものであつて、礼経に根拠を有つものではない。泰一の祭祀もまた、礼経に根拠はなく、「祀るべし」という上奏を武帝が容れたために行われるようになったものである。郊祀志は年代を明記しないが、^[1] 亳人の謬忌なる者が、次のような上奏をした。

天神の貴き者は泰一、泰一の佐を五帝と曰ふ。古者、天子春秋を以て泰一を東南郊に祭ること、日ごとに一太牢、七日なり。壇を為り、八通の鬼道を開く。

武帝はこの上奏を裁可し、太祝に命じて、長安城の東南郊に泰一の祠を置かせた。泰一祭祀の初めである。⁽²⁾ 続いて「三一」を祀ることを上奏する者があり、武帝はまたも裁可し、さきの謬忌の泰一の壇上で祀らせた。三一とは、天一・地一・泰一のこと、三年に一度、太牢をもつて祀るのだと言う。更に続いて、また別の「泰一」を祀ることを上奏する者があつた。曰く、

古へ天子常に春を以て解祠す。黄帝を祠るに一梟・破鏡を用てし、冥羊は羊を用て祠り、馬行には一青牡馬を用てし、泰一・崑山山君には牛を用てし、武夷君には乾魚を用てし、陰陽使者には一牛を以てす。と。武帝はこれも裁可し、謬忌の泰一の壇の傍らでこれを祀らせた。

さて、漢代の「泰一」に二通りあることは、すでに津田左右吉が指摘している。⁽³⁾ 一種の形而上学的觀念としての泰一と、神としての泰一とである。そして、觀念としての泰一も神としての泰一も、仔細に見ると更に細かく区別できると言う。ここで採り上げているのは後者の泰一なので後者のみについて見ると、津田は、郊祀志に出る泰一を上帝と考え、『淮南子』天文訓に出る泰一を占星術と結びついたものとして、少しく異なるとしている。だが津田は、謬忌の泰一と、後で扱う甘泉の泰一とを区別していないように見える。郊祀志に複数出てくる泰一を、すべて同じものとして考えるのには同意し難い。⁽⁴⁾

成帝の建始元年、匡衡・張譚らが、甘泉の泰一を長安へ移動するよう上奏する。これに対し、元もと長安で祀られていた三つの泰一（謬忌の泰一と、三一の泰一と、解祠の泰一と）については、翌年、ほかの諸神と同様、

廃止が建議されている。これは、謬忌の泰一などが、甘泉の泰一に比べて重要視されていなかったことを示すものである。甘泉の泰一は、概ね汾陰の后土と対で祀られているから、天であると認識されていたのであろうが、重要であるはずの天の祀りを廃止するとは考え難く、謬忌の泰一などは天だとは認識されていなかったと思われる。武帝が長安に祀った三つの泰一は、『淮南子』などに出る、占星術と結びついた泰一、すなわち星（或いは星座）ではなかったか。

『淮南子』兵略訓には、戦争での勝利に資するものとして、「星辰日月の運に明か」であることが挙げられている。兵略訓はこのことを重視しないが、武帝期の軍事行動に、占星術の考え方が、ある程度の重要性を占めていたことは疑いない。一方、『漢書』藝文志の兵書略には、『太倉兵法』や『天一兵法』といった書名が見えており、軍事における泰一の地位の高さが知れる。元鼎五年、南越を伐つに際して泰一に告祷しているのも、泰一が軍事上重要であると考えられていたからだろうが、この時、日月・北斗・登龍を画いて太一三星を象った幡が作られており、ここでの泰一は星座であると思われる。

武帝が長安に祀った泰一のうち、三一の泰一については、天一とともに祀られていることから考えると、やはり星座であるらしく見える。三一のうち地一については不明で、『史記』天官書にも『漢書』天文志にも見えない名であるけれど、天官書も天文志も、当時の星座の総てを網羅しているわけではないので、漏れたものだと考えることもできるだろう。武帝が鼎湖で病気に罹り、甘泉に神君の寿宮を置いた際も、「神君の最も貴き者を太一と曰ひ、其の佐を太禁と曰ふ。司命の属、皆之に従ふ」と言われ、北斗七星の一部である「司命」ともに記されている。

謬忌の泰一については、その「佐」とされている「五帝」が問題である。高祖二年、黒帝の祠を立てた際の「吾聞く、天に五帝有り」と。而るに四たるは、何ぞや」「吾之を知る矣、乃ち我を待ちて五を具へんとなり」という高祖の言葉によれば、雍の五時が「五帝」であると考えられていたに違いなく、またその「五帝」は「上帝」であると認識されていたらしいが、一方、「五帝坐」という星座があることからして、やはり星座（或いは星）に関わるものだと思われ、その上に位置する泰一も、同様に星座である可能性は高いと思われる。

解祠の泰一はどうか。解祠では、泰一のほかにも多数の神が祀られているが、それらの諸神のいずれも、何の神であるか判明しない。^(?)が、諸注に従えば、解祠に祀られる諸神は、雑多なものの寄せ集めであると言うことができ、星座であるともないとも言えなくなる。ただ、この泰一は、太牢ではなく牛をもって祀られるのであるから、謬忌の泰一や三一の泰一に比べて格下の扱いを受けていたらしい。では、謬忌の泰一と三一の泰一とがどう異なっているかという点、謬忌の泰一は春と秋とに祀られ、三一の泰一は三年に一度祀られるという、祭祀の時期の違いが述べられるだけなので、具体的な性格の相違については不明である。

二、甘泉の泰一の祀り

次に、甘泉の泰一について見よう。元鼎四年、武帝は雍の五時で郊祭を行い、「天の祀りがあつて地の祀りが無いのは礼として釣り合わない」という理由で、后土の祀りを汾陰に置かせる。この年の秋、「五帝は泰一の佐なり。宜しく泰一を立てて上親づから之を郊すべし」と上奏する者があつた。長安には既に泰一の壇があるので

から、この上奏は、甘泉の泰一を予想させるものである。が、「上疑ひて未だ定めず」、武帝はこの時には泰一の祀りを置かなかつた。武帝のこの逡巡の原因は何であろうか。

元鼎四年夏六月、汾陰から鼎が出土する。以後武帝は、封禪のことを臣下たちと議論し、その儀礼を儒家の方式で文飾しようとするが、儒家の經典には封禪の儀礼が記されておらず、儒家の諸生は武帝の意に沿った提案が出せないでいた。武帝の逡巡は、封禪の儀礼が決定できないことに由来するものではなかつたか。次に述べるように、武帝は、甘泉の泰一の祀りを、占星術と結びついた星座の祀りではなく、天の祀りとして行おうとしていたと思われるのだが、同時にそれは、同じく天を祀る封禪のリハーサルとしても意図されていたように思われる。元封元年冬、武帝は「古へ先づ振兵釈旅し、然る後に封禪す」と言つて、兵十余万騎を率いて朔方へ巡幸し、甘泉に帰つてから、「且に事を泰山に用ゐんとするが為に」、先に泰一に「類祠」している。「類」の祀りについては諸説あつて判然としないが、ここは「類似の祀りを行つた」、つまりリハーサルをしたのであろう。

僅か一年ほどの間にどれほどの進展があつたのか判らないが、「疑未定」の翌元鼎五年、武帝は雍に郊し、次いで甘泉に泰一の祀壇を設けさせる。

祠官の寛舒等をして泰一の祠壇を具へしむ。祠壇は亳忌の泰一の壇に放ひ、三陔なり。五帝の壇其の下に環居し、各の其の方の如くし、黄帝は西南なり。八通の鬼道を除く。泰一の用ゐる所は雍の一時の者の如くし、醴・棗・脯の属を加へ、一觶牛を殺して、以て俎豆の牢具と為す。五帝には独り俎豆の醴進有るのみ。其の下の四方地には臘を為し、羣神従者及び北斗に食せしむと云ふ。已に祠れば、昨余は皆之を燎く。其の牛は色白、白鹿其の中に居り、麋鹿中に在り、鹿中には水して之に洒す。日を祭るには牛を以てし、月を祭るに

は羊羹の特を以てす。秦一の祝宰は則ち紫及び縹を衣る。五帝は各の其の色の如くし、日は赤、月は白なり。十一月辛巳朔旦冬至吻爽、天子始めて秦一を郊拜す。朝には日に朝し、夕には月に夕して、則ち揖す。秦一を見すること雍の郊の礼の如くす。⁽⁸⁾

祀壇は長安の謬忌の秦一のそれを用い、供え物は雍の五時のものに少しく付加したものをを用いる。甘泉の秦一の祀りは、占星術へと連なる秦一と、天の祀りである雍の五時とを混成することによって、「秦一」の名による「天」の祀りを意図したものだと思われる。⁽⁹⁾

武帝の意は封禪に在った。封禪は、受命の君にのみ許された行為である。武帝は、つまりは漢朝は、革命を行ったのだ。だとすれば武帝は（漢朝は）、前代の礼制を踏襲するだけではないけない。「王者必ず前王の礼に因る。時に順ひ宜を施し、損益する所有りて、民の心に即き、稍や制作す」（『漢書』礼楽志）。況して漢は「秦の敗俗を承け」（同）ただから、礼制を改めないわけにはゆかないのだ。高祖は、取り敢えず雍の祀りを五つに増やすことしかできなかったが、今、封禪を行おうという時に及んで、尚お秦代の祭祀をそのまま踏襲し続けることはできない。甘泉に新たに天の祀りを置く意図は、この辺りにあつただろう。だからこそそれは、「秦一」という、漢代になつて初めて祀られるようになったものの名で祀られねばならなかつたのであり、またそれは、前述の通り、来るべき最大の天地の祀り、封禪のリハーサルを兼ねていたのである。元封元年夏四月の封禪の儀礼は、「秦一を郊祀するの礼の如し」と記されている。

さて、武帝の意は封禪に在った。換言すれば、封禪にしかなかつたようなのである。元封元年、宿願の封禪を果たしてから、武帝は何度か「修封」を行つてゐる。「修封」について郊祀志は、「泰山は五年に一たび修封す。

武帝凡そ五たび修封せり」と総括しており（封禪書も「封禪、五年一脩封」と記す）、実際、郊祀志の記事の個々の条に「後五年」とあるものは、武帝紀の記事によつて裏付けられる。¹¹一方、甘泉の泰一の祀りのほうは、太史令・司馬談、祠官・寬舒らによつて、「宜しく此の地の光域に因りて泰時の壇を立てて以て応を明かにすべし。太祝をして領し、秋及び臘間に祠らしめよ。三歳に天子耄たび郊見せよ」と奏されているのに、これが守られた形跡がないのである。¹³郊祀志には、泰山のふもとに明堂を作つた年に「幸甘泉、郊泰時」という記事があり、武帝紀に拠れば、明堂が作られたのは元封二年であることが判る。次に武帝紀に「郊泰時」と言われるのは元封五年夏四月。続いて天漢元年春正月、後元元年春正月であり、定期的に祀られたとは言いがたい。「天」の祀りとしての位置づけも不明確で、対になる「地」の祀りである河東・汾陰の後土の祀りが、元封二年には引き続いて、元封五年のには翌六年三月に、天漢元年のにも同年三月に行われているのに、後元元年のには対応すべき記事がない。また元封四年には、冬十月に雍の五時の祀りが、春三月には河東の後土の祀りが行われていて、「天」の祀りとして、甘泉の泰一ではなく雍の五時が考えられていたようにも見えるのだ。

これらのことは、武帝が、泰一の祀りを（后土の祀りも）重要視していなかったことの証拠ではないだろうか。武帝にとつて天地の祀りとは、取りも直さず封禪だったのだ。されば、封禪と、封禪に関わる「修封」とは、きちんと定期的に執り行われているのに対し、甘泉の泰一の祀りは、不定期に思いついたように行われるに止まつたのだろう。無論、郊祀志の武帝の項の結びに「甘泉の泰一・汾陰の後土は、三年に親づから郊祠す」とある（封禪書も同じ）以上は、祀りは定期的に執り行われていたのに、史官がこれをきちんと記録しなかつたにすぎない可能性もあるが、史官が杜撰な記録しか残さなかつたということ自体、武帝が泰一や后土の祀りを重要視し

ていなかったことの証拠であるだろう。武帝にとって、甘泉の泰一の祀りは、結局のところ封禪のリハーサルにすぎなかったのである。反面、「尤も鬼神の祀りを敬」つた武帝は、祀りを増やすばかりで削減することができず、意義を有たなくなつたと思われる祭祀でも、不定期に行い続けたのではなからうか。

三、昭帝以後

武帝期を過ぎても、祭祀は、礼経に根拠を有つものではなく、皇帝の意のままに行われるものであった。だから、武帝を継いだ昭帝が、「未だ嘗て親づから巡祭せずと云ふ」などということが起こり得たのである。

宣帝も、初めは「宗廟の祀りに非ずんば出でず」という状態であつた。それが、神爵元年春正月、甘泉の泰一の祀りを行った際に「数ば美祥有」つたためか、三十年近くも放置されていた甘泉の泰一の祀りを、再び行うようになる（この時には、三月に、河東の后土の祀りを行っている）。神爵四年春二月、「泰一・五帝・后土の祠を修興せよ」という詔が出される（宣帝紀）。以後、宣帝は、五鳳元年春正月、甘露元年春正月、甘露三年春正月、黄龍元年春正月に、甘泉に行幸して泰時に郊している。甘露三年のがなければ五年一郊なのだが、或いはこの年から三年一郊に改めたのだろうか。¹⁵⁾

宣帝期に於ける泰一は、どういうものであると認識されていたのか。同年の后土の祀りに先行して祀られる例があることから、天であると認識されていたと考えられる。宣帝期以降、封禪も修封も一度も行われていないから、天としての泰一、その「佐」の五帝（雍の五時）、地としての后土という位置づけは、確定したものとな

つていたのであろう。

宣帝の後を継いだ元帝は「旧儀に遵ひ」、即位の翌年初元二年春正月、甘泉に行幸して泰時に郊した（郊祀志には、この時同時に河東の后土や雍の五時の祀りを行ったように記されているが、本紀には河東や雍への行幸の記事は見えない）。これを最初に、初元四年、永光元年、永光五年、建昭二年のそれぞれ春正月、甘泉に行幸し、泰時に郊している。永光三年があれば三年一郊が貫かれていることになるのだが、「凡五奉泰時」という記述から考えて誤脱とは思えない。永光三年に泰一の祀りを行わなかった理由については、不明というしかない。⁽¹⁶⁾

さて、泰一の祀りは問題にはならなかったようだが、元帝期、宗廟の祀りが問題になった。郊祀志によると口火を切ったのは貢禹であり、「漢家の宗廟祭祀、多く古礼に應ぜず」と言っている。元帝もこれを是認したが、貢禹の死により改革はなされなかった。「古礼に應ぜず」という上奏は、武帝には聴かれなかったものである。元帝がこれを認めたことは、礼経が整備され、その權威が高まり、皇帝もこれを無視できなくなってきたことを物語っているだろう。ただ、宗廟の祀りが問題とされた理由は、それだけではないように思われる。『漢書』韋玄成伝には、高祖が太上皇の廟を各国に建てたのに倣って恵帝や景帝らが統統と廟を建てたために数が増え、郡国に在るものだけで百六十七、京師に在るものは百七十六に上り、一年に供え物二万四千四百五十五、衛士四万五千二百二十九人、祝宰・樂人一万二千四百七十七人を要した（犠牲を養うための卒は数えない）と記されている。このような膨大な数に上れば、その多さだけでも整理が要求されるだろうし、況して、「黎民饑寒」「歳不登」等という文言が連年のように詔勅に見られる状況では、莫大な国費を祭祀に費やすことが問題とされるのは、当然のことだと言えるだろう。韋玄成は丞相になると、次次に宗廟を廃止してゆく。ただ元帝は晩年病がちで氣

が弱くなったのか、一旦廃止した宗廟の祀りを、結局元に戻してしまっている。

成帝期に入ると、泰一の祀りにも改革の波が押し寄せる。「初即位」というから年号は元帝の竟寧元年の時であるかも知れないが、丞相の匡衡らが、甘泉・汾陰が京師の正南北にないという理由で、これを長安に移すように上奏する。天地の祀壇は京師の正南北になければならないというのである。反対論もあったが賛成が多数を占め、建始元年十二月、泰一と后土の祀壇が長安の南北郊に作られ、甘泉と汾陰との祀壇は廃止された。¹⁷完全に天の祀壇であると認識されていて、この上奏文には「泰一」の語は最早や出てこない。匡衡は更に、泰一を祀る際の儀式を縮小することや、雍の五時を廃止することを次々と上奏し、容れられている。¹⁸翌年には、謬忌の泰一や三一をはじめ、長安や雍にあった祀りの七割近くのものを、「礼に応じていない」とか「重複している」とかの理由で廃止してしまう。これらのことは、宗廟の整理と同じく、礼経の權威が確立したことや、国家財政の危機に拠るのであるが、更に別の理由も考えられる。長安に移された甘泉の泰時が天の祀りとしての地位を確立したために、その「佐」に過ぎない雍の五時や、長安に元もとあつた星祀りとしての泰一の祀りは、相對的に地位が低下して存在意義を失つたのであろう。

しかし、宗廟の存廢が一定しなかつたように、天地の祭祀も亦た存廢を繰り返すこととなる。十数年の時を経て、永始二年冬十一月、成帝は雍に行幸し、五時の祀りを行った。突然雍の五時の祀りが復活されたのは、成帝に世継ぎが生まれなためである。翌永始三年冬十月には、「継嗣無きを以ての故に」、皇太后を經由して、「其れ甘泉の泰時・汾陰の後土を復して故の如くし、雍の五時・陳宝の祠の陳倉に在る者に及べ」という詔が発せられた。¹⁹皇帝は再び自ら祀りを行い、長安や雍にあつて廃止された祀りの半数近くを復活させた。だが、それでも

世継ぎは得られなかった。「長安の南北郊を復活すべきだ」という声が上がリ、成帝が崩御した綏和二年三月、皇太后は「其れ南北郊を長安に復して故の如くせよ」との詔を出す。次の哀帝は病がちで、建平三年、先の皇太后、現皇太后は「其れ甘泉の泰時・汾陰の後土の祠を復して故の如くせよ」と詔し、冬十一月壬子、甘泉の泰時・汾陰の後土の祀りを復活させ、長安の南北郊を廢止した。

復活したといつても、その内容は旧のままではない。泰一について見れば、永始三年冬十月の詔勅に「蓋し聞く、王者、事を天地に承け、泰一に交接するに、尊ぶこと祭祀より著きは莫し」と言われているのによれば、天そのものであるとは認識されていないようにも見える。²⁰⁾ また、長安で復活した祀りについては、旧来なら泰一が含まれていたはずであるが、その名は逐一記されてはいない。それらが、最早や重要視されてはいなかったからだろう。

結びに代えて

平帝の元始五年、大司馬となつた王莽は、長安の南北郊を復活することを上奏する。全く「天」と同義になつてしまつた泰一の名は（王莽の上奏文中に、「天神を称して皇天上帝と曰ひ、泰一の兆を泰時と曰ふ」とある）、『後漢書』祭祀志からはその姿を消してしまふことになるのであつた。

注

- (1) 『資治通鑑』は元光二年に置く。
- (2) 平帝・元始五年の王莽の上奏には、文帝十六年、新垣平の上奏によつて渭陽に五帝の廟を立てた際、同時に泰一・地祇を祭り、高祖をこれに配したと言うが、郊祀志も封禪書も、五帝の廟の設置とともに泰一を祀つたとは言わない。
- (3) 「太一について」、白鳥博士還曆記念東洋史論叢、大正十四年十一月。
- (4) 津田は、三一の泰一については「信仰的要素を欠いている」と述べるだけであり、また解祠の泰一には言及しない。
- (5) 大崎正次『中国の星座の歴史』、雄山閣、昭和六十二年。
- (6) 『資治通鑑』は元狩五年に置く。或いは元狩三年か。ただこの泰一は、神がかりする神であつたらしいので、星座ではないかも知れない。
- (7) 顔師古の引く張晏は、黄帝については「五帝之首也。歳之始也」と言うが、その他の諸神については沈黙する。孟康は陰陽使者について「陰陽之神也」とするが、具体的にはどういう神なのか判らない。沈欽韓は羴羊に、『山海經』東山經・東次三経に出る、人身羊角で一牡羊をもつて祀られる神を当てる。
- (8) 三陔について、顔師古は、「陔、重也。三陔、三重壇也」と言う。賡は、神位を連ねて祀ること。「鹿中水而酒之」については、晋灼は「言合牲物而燎之也」と言うが、顔師古が「以水及酒合内鹿中」と言っているののほうが正しいだろう。
- (9) 『漢書』武帝紀のこの時の詔には、「望見泰一、修天文禮」という言葉が出てくる。「天文」の語からは占星術へと連なつてゆく泰一（古い泰一）が聯想されるが、この「修天文禮」は、顔師古や王先謙の言うように、「朝朝日夕夕月」を指していると思われる。これに対して長安の泰一は、星（星座）の祀りであり続けたようである。元封元年、「瓜のような」填星が出現し、有司は「陛下漢家の封禪を建つれば、天其れ徳星を報ゆと云ふ」と奏上した。翌二年、雍の五時の祀りを終えて還御した武帝は、泰一を祀つて、「徳星昭衍なるは、厥れ維れ休祥なり。寿星仍りに出で、淵耀光明す。信星昭見すれば、皇帝敬拜す、泰祝之れ享けよ」という祝詞を捧げている。

(10) 雍の五時を「佐」として泰一の下位に置く意図も、ここに在ったのだろう。

(11) 「凡五修封」とは以下の五条を指す（先に挙げるのが郊祀志の記事、括弧内が武帝紀の記事）。

1、明年四月、至高修封焉。（元封五年春三月、還至泰山、増封。）

2、復還泰山、修五年之礼如前、而加禅祠石闕。（太初三年夏四月、還、修封泰山、禮石闕。）

3、其後五年、復至泰山修封。（天漢三年三月、行幸泰山、修封、祀明堂。）

4、後五年、復至泰山修封。東幸琅邪、礼日成山、登之罘、浮大海、用事八神延年。この記事については、武帝紀と

の間に齟齬が見られる。武帝紀では、「幸琅邪、礼日成山、登之罘、浮大海」は太始三年に、「修封」は太始四年（春三月、行幸泰山。壬午、祀高祖于明堂、以配上帝、因受計。癸未、祀孝景皇帝于明堂。甲申、修封。丙戌、禪石闕。）に置かれている。次の「修封」が征和四年であることを考えると、第四次の「修封」は太始四年であつたと覚しく、郊祀志は天漢三年から数えた「後五年」に合わせてしまったのであろう。

5、後五年、上復修封於泰山。（征和四年三月、還幸泰山、修封。庚寅、祀于明堂。癸巳、禮石闕。）

(12) 原文は「三歳」を「二歳」に作る。王先謙が『史記』封禅書によつて「三」に改めるのに従う。

(13) 「三歳天子嘗郊見」とは恐らく、雍の五時について「後常三歳一郊」とあるのに拠るのだろう。だが、雍の五時も、三年ごとにきちんと祀られてはいなかつたようである。武帝紀によれば、元光二年冬十月、武帝は初めて雍に至り、五時に郊見している。次に武帝が雍の五時に祀つたとされているのは元狩元年冬十月。この間、元光六年六月には「行幸雍」とあるものの五時についての言及はなく、また郊祀志には、元光六年でも元狩元年でもないとと思われる「後二年、郊雍、獲一角獸、若麋然」の記事がある。「一角獸を獲た」という記事は、元狩元年の「白麟を獲た」という記事を思わせるが、ここは謬忌の泰一が置かれた「後二年」であるので元光四年であると思われる。元光の次の元朔年間には雍の五時についての記事がなく、元狩元年冬十月に「行幸雍、祠五時、獲白麟、作白麟之歌」の記事があり、翌元狩二年冬十月にも「行幸雍、祠五時」とある。次は元鼎四年冬十月、続いて元鼎五年冬十月、元封二年冬十月、太始四年十二

月というふうで、雍の五時は、武帝期には定期的に祀られていたとは言いがたい。

(14) 泰一と后土とを対で扱った例としては、元鼎六年に郊祀の樂を制定した際に「禱祠泰一・后土、始用樂舞」とあるのや、元封二年秋に泰山のふもとに明堂を作った際に「祠泰一・五帝於明堂上坐、……祠后土於下房、以二十太牢」とあるの等が挙げられる。

(15) なお、五鳳二年春三月には雍の五時の祀りが行われ、五鳳三年三月には河東の后土の祀りが行われている。

(16) なお、后土の祀りにについても「凡五奉」と言われているが、初元二年のほか、初元四年、永光元年についても、本紀に記事が見えない。雍の五時は、初元五年、永光四年、建昭元年のそれぞれ春三月に、「上幸雍、郊五時」の記事がある。

(17) 実際に南北郊で祀りが行われたのは、南郊が建始二年春正月辛巳、北郊が同年三月辛丑のことである。なお、建始元年十二月、甘泉と汾陰との祀りが廃止された時、甘泉では大風が吹き荒れ、大木が根こそぎになった。このことを憂慮した成帝からの下問を受けた劉向は、甘泉と汾陰との祀りを廃止したことを誇り、成帝も後悔したと、郊祀志は伝えている。

(18) 雍の五時の廃止は建始二年春正月。

(19) 甘泉・汾陰で祀りを行ったのは、永始四年、元延二年、元延四年、綏和二年。泰一は春正月に、后土は三月に祀られた。雍の五時は、元延元年、元延三年、綏和元年のそれぞれ三月に祀りが行われている。

(20) 杜鄴から王商への「長安の南北郊を復活すべし」という意見書の中の「甘泉・河東天地郊祀」という文言から考えると、泰一は相変わらず天であると認識されていたように思われる。